

科目区分「教科又は教職に関する科目」 授業科目名「教育実践演習」「教職実践特講」  
担当教員：白松 賢、山崎哲司、東賢司、日野克博

## 三大学交流シンポジウムによる教育体験の質的向上

学校教育講座・白松 賢

### ・授業の流れ

「教育実践演習」「教職実践特講」の講義は、フレンドシップ事業「地域連携実習」の体験を基に、大学の専門的知識・技能等との関連を考察し、自らの実習経験の質を向上させることを目的としている。

今年度より、「教職実践特講」を改編し、「教育実践演習」「教育実践演習」「教育実践演習」と系統的な省察科目として、年次進行で改善していくことをねらいとしている。

- 第一回 オリエンテーション
- 第二回 教育実習「道徳」の授業から省察の意味を考える
- 第三回 相互チェックで自己評価を高めよう
- 第四回 地域連携実習で向上した資質能力と発見した課題
- 第五回 実習経験に学ぶ ～四年生から下級生へのアドバイス～
- 第六回 学生企画「三大学交流地域連携実習」シンポジウムに向けて  
発表用ポスター及びプレゼンテーション内容作成
- 第七回 同上
- 第八回・第九回 学生企画「三大学交流地域連携実習」シンポジウム  
愛媛大学（学生企画型地域連携実習の成果と地域連携実習の体系化）  
三重大学（学生企画ふれあい実習のルーブリックを用いた子どもの発達評価）  
島根大学（1000時間体験実習と成果）
- 第十回 保健室登校の課題  
ゲストスピーカー（小学校養護教諭）
- 第十一回 教育支援アシスタントの課題1 ～特別支援教育～  
ゲストスピーカー（苅田知則及び特別支援コーディネーター現職大学院生三名）
- 第十二回 保護者との信頼関係を深めるために

～クレーム対応ロールプレイング～

ゲストスピーカー（元松山市 PTA 連合会会長・会計）

第十三回 教育支援アシスタントの課題2 ～算数のくりあがり事例として～

ゲストスピーカー（吉村直道 算数・数学教育担当者）

第十四回 「子どもと向き合い、寄り添うとは？～一色先生と語ろう～」

中途退学・不登校・非行の課題を抱えた子どもたちと関わる経験から

ゲストスピーカー（代々木高等学校志摩学校長 一色真司）

第一五回 シンポジウム「地域連携実習における学びと課題」

### ・三大学交流シンポジウム

平成 19 年 12 月 1 日土曜日に愛媛大学教育学部大講義室及び 103 教室にて、愛媛大学・島根大学・三重大学の三大学教育学部交流シンポジウムを開催し、学生・大学教員・地域連携実習協力機関の方々等、230 名を超える参加者が集った。このシンポジウムは、教育学部のカリキュラムに位置づけられながらも、学生の主体的な参加によって行われる実習体験の質を深めることを目的とした。

まず 13 時から 15 時まで大講義室で、三大学交流シンポジウムを行い、シンポジウムでは、愛媛大学から(1)学生企画型地域連携実習「東雲公民館わくわくチャレンジサタデー」（田中元志：3 回生）「ダンボクラブ」（長井勇人：3 回生、角南真弓：4 回生）「久米公民館わくわくチャレンジサタデー」（國田直子、山口洋平：3 回生）を報告しました。三重大学からは(2)「わくわくコミュニケーションクラブ」、島根大学からは(3)「1000 時間体験実習」といった先進的で多様な取り組みが報告された。これらの教育体験の活動内容と、そこから深化拡充される資質能力についての報告を学生自らがすることによって、報告者・

参加者ともに自らの学びを深めるシンポジウムとなった。

その後、15時半から17時まで103教室において、シンポジウムで報告された活動以外を含んだ教育体験のポスターセッションが行われ、対面型の質疑応答が行われた。

この成果について参加学生の感想を分析してみると、特に上級生は、大学間交流により、お互いの活動内容から刺激を受け、教育学部それぞれ固有の取り組みの意味を見いだすことや参加している活動にアイデンティティを確立するなど、自己経験の再組織化を得ていた。また1年生や2年生にとっては、教育学部で経験する実践体験の多様さを知り、上級生からアドバイスを受けることにより、今後の自己成長のプロセスの見取りを得る機会となっていた。



図1 愛媛大学の報告（学生）



図2 島根大学の報告（学生）



図3 三重大学の報告（学生）



図4 パネルディスカッション

#### ・講義科目の成果と課題

##### 1. 成果

三大学交流シンポジウムを取り入れることにより、教育体験の量を増加させることと質を深化することの両側面について、メリットデメリットを考えることができた。さらに、教育体験の質を深化するための方策を体感することができたことを成果としてあげることができる。昨年時の課題であった、質的深化の一つの方法を確立することができた。また異学年による学びあいを活性化することも可能となった。さらに島根大学・三重大学の参加教員から、この取組を評価していただき、今後もお互いに学生が刺激しあう関係を継続していきたい、という声を頂いた。

##### 2. 課題

2回生から4回生までを同時に行うことが多く、教育実習を終えた3回生及び4回生と、実習を経験していない2回生との間には大きな違いがあり、各学年毎の評価基準を明確化し、学習を深化する工夫が求められている。(平成20年度シラバスで改善)。

実習での課題を持っている学生と不十分な学生の課題意識の違いにも配慮する必要がある。